

## 内村鑑三『ロマ書の研究』 第三八講 救いの完成（五） 八章一四―一七節

独立系研究者 倉井香矛哉

### ・「罪」という問題＝「神よりの離絶」

「普通、個々の悪の実行を罪と考える者が信者にも多い。しかしながら、パウロをしていわしむれば、またキリスト教をしていわしむれば、罪とは、甲の悪事、乙の不徳の問題ではない。神を離れている事、これがすなわち罪である。」

「キリスト教にいて罪とは、道徳的ではなくして宗教的である。人と人の間の善悪の問題ではない。もつぱら神と人との関係の上に成り立つ事である。」

↓「罪」とは「神を離れている事」（＝神よりの離絶）であり、「神と人との関係の上に成り立つ事」である。したがって、「実に神に立ち帰ることが第一の問題」なのであって、「いわゆる道徳的の善悪問題は第一問題ではない」とされる。

※ここで例示として、電球は電線（↓電源）を離れていては光を放ち得ない、という事実が示される。「われらは自己いっさいの考量、工夫、計策、努力を捨てて、ただ生命の源なる神に帰ればよいのである」と。これこそが、「悔い改め」であり、神への「復帰」である。すなわち、「罪を離れる事」なのである。「神はどこしえに光と生命の本源である。」

### ・「神の子」となる道＝「三位一体」の神の「実験」

「悔い改めて神に帰するに至ればすなわち「神の子」となったのである。」「しかしながら、かくなりし者といえども、一たびキリストとの連結絶ゆる時は神の子でなくなるのである。」

「聖書は、生まれながらの人を決して「神の子」とは呼ばない。」「キリストを信じ神に帰属して神の国に入るに至りし者のみを「神の子」という。すなわち「神の子」とは、人類の全部をささずして、その小部分をささしている語である。」

↓三位一体（神の霊、キリストの霊、聖霊）についての解説につづく。

「ロマ書八章によって見るに、人の救われるは実にこの父なる神とキリストと聖霊との共同事業である。換言すれば、三位一体の神のわざである。」

↓三位一体についての理論的な説明は難しいが、その問題の要点は、「実験の上の事実である」ということ「に他ならない。」

「三というも、実は一の中の三であることを実感せる者にむかつては、三位一体という教義ほど満足を与うるものはないのである。」「これが人の救われる唯一の道である。」

「三位一体は、理論の上には容易に理解しがたきことである。しかしながら、この理由をもってこのたいせつなる真理を否定せんとするは大なる愚である。すべて真理というものは―ことに宗教的真理は―頭脳でわかつたらとて真にわかつたのではなく、頭脳でわからぬからとて真にわからぬのではない。」

「靈魂の求めるところは理論ではない。実感である。三位一体というがごときも、理論の説明は充分にできない。頭脳では容易にわからない。しかしながら神の子とせられた者は、実験の上にこの真理を味得るのである。」

### ・神の子とせられし者の嗣業＝「改造せられたる宇宙万物」の「賦与」

「神の子とせられし者はキリストと共に後嗣となるといふ。さらば嗣業として何を賜われるのであるか。答えていふ、嗣業は、改造せられたる宇宙万物であると。神の子は、改造せられたる体を与えられて、改造せられたる全宇宙を嗣業として受けるのである。」

↓この語りは、論理的には飛躍を含んでいるようにも思われる。しかしながら、その核心にあるのは、信仰は個人の内面的な救いとどまらない、ということであろうか。信仰に生きることが、宇宙論、時間論的な根拠を与えられることでもある。「希望」は、内的な救い、外的な道徳をこえた「全宇宙を賜われる光栄」にあるのだ。

「改造せられたる宇宙万物の賦与ふよ、これが神の側かたより見たる人の救いである。救いとはこれ以下の事ではない。神の子とせられたのは、すなわちクリスチャンとせられたのは、これを与えられんがためである。罪より救い、死より救い、ついに全宇宙を賜いてそこに限りなき生命を付与する事、これすなわち救いである。」

↓「われら、はたしてこの大希望をいだけてそのために聖書の研究をしているか。小道德や小改善や社会救済ぐらいを目的として聖書を研究しているか。われら深く省察すべきである。」

「信者が感受するところの艱難は、浅い肉体の艱難ではない。広い宇宙的の艱難と、深い靈的の艱難である。宇宙はクリスチャンと共に苦しみ、聖霊もまたクリスチャンと共に嘆くのである。」

### ・クリスチャンの苦しみⅡ「栄光の反面」

「この世においてキリストと共に苦しむは、クリスチャンの当然の運命である。今の苦難、後の光栄、これは連続せる一時の前と後である。またこの苦難はかの光栄の反面であるということもできる。ゆえに、苦しみを訴えて哀声を放つのではない。光栄の反面としての苦しみを思うのである。」

「すべてのクリスチャンの苦しみも、後に賜わらんとする栄えに比してはあまりに小であるのである。それほどに、賜わらんとする栄えは大であるのである。」

### 第三八講 約説 神の子とその光栄

「いかにして神の子たるを得んか、これ先決問題である。」

「まず信じ、信仰に応じて権能Ⅱ神の霊Ⅱ聖霊を与えられ、しかして神の子となるのである。されども神の子となってしまうのではない。神のひとり子に連なりて、彼にありて神の子となったのである。人は、信仰をもってイエスを連なる間だけ、神の子であるのである。」

「子となるとは、子に連なることである。」

Ⅱ 関係論的な把握、神の仲保者としてのイエス・キリスト。

「人が信仰をもって神の子イエスと連なる時に、イエスに充実する神の霊は彼に伝わりて、彼もまたイエスがあらごとくに神の子となるのである。」

「神は三位である。父と子と聖霊である。しかして人の救いは三位さんみの神の共同事業である。」

「神の子の嗣業は、改造されたる宇宙である。」

「光栄は至大である。されども光栄に苦難くるしみが伴う。キリストと同体になりて、彼の栄辱を分かたざるを得ない。」